

実践コミュニティの場として小中連携プログラム ーオーストラリアの日本語教育を事例として

奥村真司 (武庫川女子大学)

研究の目的

本研究では、オーストラリア、ビクトリア州の日本語教育における小学生と中等学校の生徒とのつながりに着目し、小中連携訪問プログラムの事例を報告するとともに、その内容を実践コミュニティの理論をもとに考察する。

研究の価値・意義

最近の言語教育においては、異なる教育段階の連携が重要視されている。しかしながら、学校間連携の欠如は世界中の日本語教育において大きな課題となっている。多くの児童、生徒の学習者を擁するオーストラリア、ビクトリア州の日本語教育は、コミュニティの中での人と人とのつながりを重要視し、学校教育においても現場の教師が、日本語教育の連続性(アーティキュレーション)を高めるために様々な取り組みを行っている。その一つとして、本研究で紹介する小中連携訪問プログラムの事例は、日本語教育における連続性(アーティキュレーション)の推進に示唆を与えるものである。

研究方法

小中連携訪問プログラムを行った小学校の日本語教師へインタビューとEメールによる追加質問の結果を、「実践コミュニティ(Community of Practice)」(Wenger & Wenger, 2015)の概念を援用し分析する。

結果と考察

インタビューの内容分析の結果、この小中連携訪問プログラムは、実際の状況の中での日本語使用があり、小学生、中等学校の生徒のどちらにも有意義なものであることが認められた。具体的には、児童にとってもは、日本語学習に対する内発的動機を高める機会となり、中等学校の生徒にとっては、自分自身の日本語の学びを振り返るよい機会となった。またこのプログラムは、ビクトリア州教育省が推進する英語以外の言語(Languages)学習の連続性(アーティキュレーション)の推進にもつながっていることがわかった。